

2. 避難行動

事業者は、正確な情報を確認し避難が必要と判断した場合には、従業員等に対し、放送設備等を利用して避難の指示を行います。避難時には、従業員等の正確な人数と負傷など異常の有無を常に把握し、二次災害が発生しないよう、適切に避難誘導を実施しましょう。また、避難する方は混乱や危険防止のため、事業所単位など協力して集団避難を行うことが有効です。

○ 帰宅の指示

台風や豪雨が予想される場合は、交通機関が通常運行しているうちに、従業員の安全を第一に考慮し、帰宅させることが必要です。台風の進路変更や雨量の減少が予想されても、空振りをおそれず、早目に判断することが大切です。

危機管理の行動原則

- 疑わしい時は行動する
- 最悪の事態を想定して行動する
- 空振りは許されるが、見逃しは許されない

○ 避難のポイント

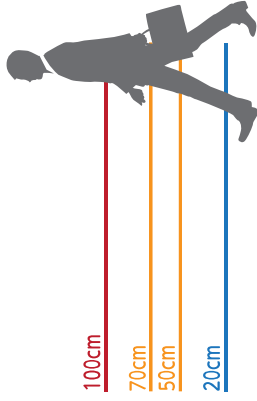
避難勧告・指示は、区から発表されますが、避難の必要性を感じたら、避難勧告・指示のあるなしにかかわらず、自主的に避難しましょう。

避難するときの4つのポイント

1 事業所を出発するとき	<ul style="list-style-type: none"> ● 電気のブレーカーを切り、ガスの元栓を締めましょう。 ● 非常持出品などは最小限にし、リュックサックなどに入れて、両手が空くようにしましょう。 ● 避難する際は、避難に適した靴（運動靴等）を履きましょう。（長靴やサンダルは危険です） ● 隣近所の事業所にも声を掛けましょう。 ● 2人以上で避難しましょう。
2 車での避難は避ける	<ul style="list-style-type: none"> ● 道路の冠水により、車が動かなくなることがあります。 ● 車が浸水地域で動かなくなった場合は、車を放置します。 ● 特別な場合を除き徒歩で避難しましょう。
3 足元の安全確認	<ul style="list-style-type: none"> ● 冠水した道路は足元が見えませんが、夜間はさらに危険です。 ● 大雨により、マンホールのふたが外れることがあります。傘や長い棒などで足元を確認しながら進みましょう。
4 二次災害の防止	<ul style="list-style-type: none"> ● 避難途中のがけ崩れなどに注意しましょう。 ● 川や橋に近づかないようにしましょう。

○ 避難が遅れてしまったら

浸水地域での移動はとても危険です。歩ける浸水の深さは、平地で水流のない場合、男性で約70cm、女性で約50cmと言われています。浸水の深さが腰まであるようなら、歩いての避難は困難です。また、流速がある場合には、20cm程度の水かさでも危険になります。高所で救援を待ちましょう。



○ 車からの避難

冠水した道路で車が動かなくなったり、水圧でドアが開かなくなることがあります。しかし、すぐに車内まで浸水するわけではありませんので、落ち着いてシートベルトをはずし、窓を開けて脱出しましょう。



パワーウィンドウが開かないときは

電気系統のトラブルなどにより、パワーウィンドウが開かないときは、あらかじめ常備している窓ガラス粉砕用ハンマーを活用して、窓ガラスを割って脱出しましょう。

窓ガラスを割る手段がないときは

車内まで浸水し車内外の水圧差が小さくなるまではドアを開けることはできません。浸水するのを冷静に待ち、ドアロックを解除して、ドアを足で蹴って脱出しましょう。

○ 復旧に向けて

二次災害に注意しながら、まずは後片付けを進め、早期に事業を再開できるような復旧活動を実施しましょう。浸水など水害からの復旧には、建物・設備等の洗浄、修理、代替品の購入等に時間を要する可能性があります。長期間にわたり事業活動が阻害されることがあります。

また汚水が混入した場合には、感染症等を予防するため洗浄により汚れを除去し、十分に乾燥させた後、消毒作業を行うなど、衛生対策にも注意する必要があります。

東海豪雨における地域支援事例

自動車メーカーのC社は、記録的豪雨の影響で工場とその周辺地域が浸水被害にあいました。工場復旧のためのトラックが周辺道路を往來すると、災害ごみの回収スペースや交通の妨げになる等、地域の復旧を遅らせてしまうことから、工場周辺の地域で発生した災害ごみの回収からスタートする等、地域復旧支援活動を優先しました。

参照：日本損害保険協会発行「東海豪雨 そのとき企業は」(2004年6月) <http://www.sompo.or.jp/archive/publish/bousai/0003.html>